

茨城県結城市

峯崎遺跡

— 下り松南部土地区画整理事業に伴う峯崎遺跡試掘調査報告書 —

1998

結城市

序

峯崎遺跡は、鹿窪運動公園の拡張に関連して発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけての百軒をこえる竪穴式住居跡や、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡など、貴重な遺構や遺物が数多く検出され、大きな成果を得ることができました。そして、これらの遺構は北側に広がる様相を呈しており、さらなる調査が待たれていたところでした。

今回、下り松南部土地区画整理事業に伴い、遺跡北側部分の試掘調査が行われ、数多くの遺構や遺物が発見されました。調査により得られた資料は、本市の古代史を紐解く上で貴重な財産となるものであり、報告書としてまとめられ発刊されますことは、誠に意義深いことでもあります。

この度の調査にあたり、遺跡の重要性を認識いただき調査にご協力をいただきました地元の皆様方、そして、調査を担当し、その成果をまとめていただきました山武考古学研究所に心から感謝を申し上げまして、ご挨拶といたします。

平成10年11月

結城市長 平塚 明

例言

1. 本書は、峯崎遺跡第5次・第6次調査（試掘調査）の報告書である。
2. 調査は、掘立柱建物群の範囲確認を主たる目的として、結城市教育委員会の指導のもと山武考古学研究所が実施した。
3. 遺跡の名称・所在地・調査面積・調査期間・調査担当者は下記の通りである。

遺跡名	峯崎遺跡第5次調査・6次調査
所在地	茨城県結城市結城字峯崎地内
調査面積	第5次：500m ² 第6次：500m ²
調査期間	第5次：平成9年3月5日 ～同年3月25日 第6次：平成9年7月22日 ～同年8月13日
調査担当者	第5次：長谷川一郎 間宮正光 第6次：松田政基
4. 本書の編集及び資料整理は、山武考古学研究所において間宮が担当して行い、作成にあたっては江口弘子の協力を得た。
5. 本書の執筆分担は、Ⅰが結城市教育委員会、Ⅱ～Ⅴが間宮である。

6. 文字資料の判読は、平川南 国立歴史民俗博物館教授にご指導いただいた。
7. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜った。

平川南 鶴見貞夫 土生朗治 国立歴史民俗博物館
茨城県教育委員会 茨城県教育財団
結城市区画整理課 結城市都市計画課
8. 調査の参加者は下記の通りである。

宮田元司 本橋貞二 佐々木幹夫 芝田武次
永田由貴子 前橋廣男 吉村豊子 菊地初枝
北原隆 関根好江 氏家文子 北條久代
荒川博 青木みね子

目次

序	
例言	
目次	
Ⅰ 調査に至る経緯	1
Ⅱ 遺跡の立地と歴史的環境	1
Ⅲ 調査の方法と経過	3
Ⅳ 遺構と遺物	5
Ⅴ まとめ	10

I 調査に至る経緯

峯崎遺跡は、鬼怒川と田川によって形成された沖積低地から西に延びた小支谷に南面しており、畑地が広がっていた。畑の表面からは、縄文式土器や石器、奈良時代から平安時代にかけての土器片などを多数採取することができ、この地域一帯に、かつて長い年月にわたり大きな集落が営まれていたことが予想されていた。

平成2年度から鹿窪運動公園の拡張に関連して平成5年度まで、本遺跡南側部分約15,000㎡の発掘調査を、山武考古学研究所に委託し実施した。

平成3年、下り松南部区画整理推進委員会が発足され、その事業区域内に本遺跡が含まれていた為、平成6年度、区画整理課と教育委員会で遺跡の取り扱いについて協議し、遺跡の北側の広がりを確認する為、2ブロック1,000㎡の試掘調査を実施することにした。調査は平成8年度、9年度の2ヶ年にかけて、山武考古学研究所に委託して実施した。

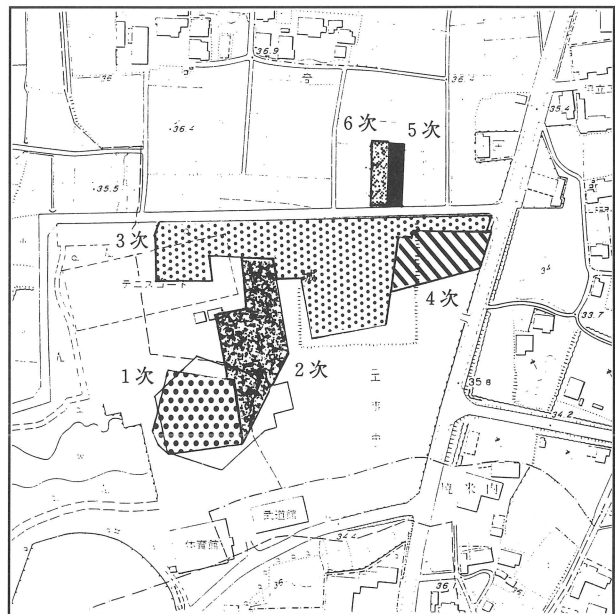
II 遺跡の立地と歴史的環境

遺跡の立地 結城市は南北に細長く、地形的には標高37m前後の結城台地と、それを自然流水で開析したヤトと称する沖積低地、鬼怒川により形成された沖積低地とに大別される。本遺跡は、JR水戸線結城駅の南方約1.5km地点で、この結城台地上に立地し、北側を除いた東南西の三方にはヤトが巡り遺跡を限る。

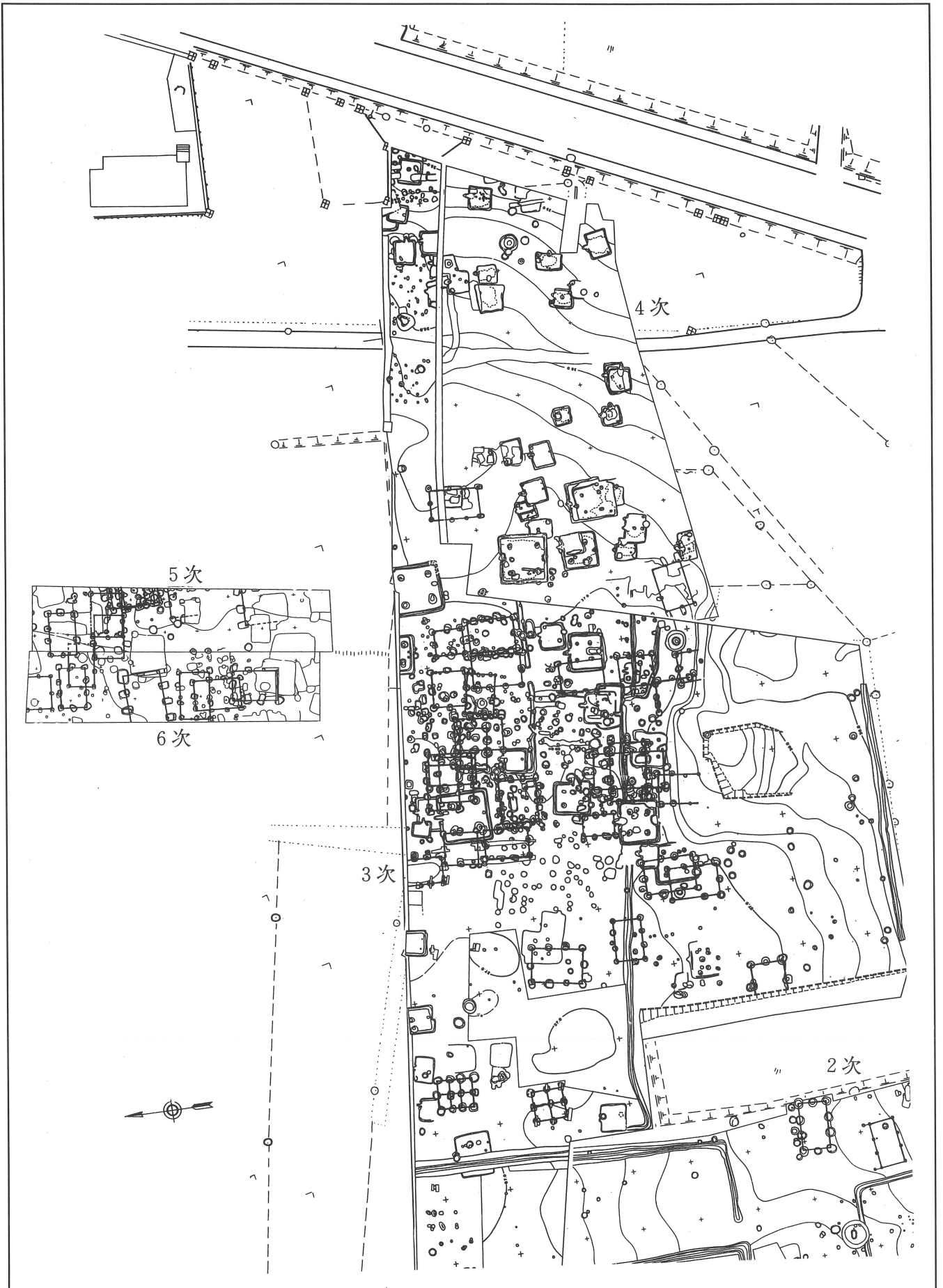
歴史的環境 律令期における結城市は、下総国の結城郡に相当し、東西を下野国と常陸国に囲まれた下総国の最北端に位置している。特に結城郡のうち結城郷は、郡の中心となるべき行政区画であり、郡衙がおかれていた。郡衙には付属寺院として郡寺が建立されており、現在結城廃寺がそれと考えられている。この結城廃寺は、本遺跡の南方約2kmに位置し、奈良時代初頭に創建され、嘉吉元年(1441)の結城合戦において戦火により焼失するまでの700年間、古代から中世において窮知された大寺院であった。廃寺は『将門記』にあらわれる「結城郡法城寺」と推定されており、昭和63年以来、結城市教育委員会の手により数次に及ぶ調査が実施され、法隆寺銅板如来三尊像と同型の原型から造られた如来倚像や、法隆寺献納宝物押出仏と同原型から造られた如来坐像等の磚仏が出土している。また、この結城廃寺に供給した瓦は、結城廃寺から北東へ約500m離れた台地の突端に位置する八幡瓦窯で焼かれたものである。この他峯崎遺跡の北約200mには県教育財団の調査により小銅造仏・皇朝十二銭が出土した油内・下り松遺跡が存在する。



第1図 遺跡の位置 (1:50,000) 低地



第2図 調査区位置図 (1:5,000)



第3図 峯崎遺跡全体図 (1:800)

峯崎遺跡のこれまでの調査 峯崎遺跡は過去4次に亘り約15,000㎡の調査が実施され、住居跡136軒・掘立柱建物跡34棟をはじめとした8世紀前半から10世紀へかけての遺構・遺物が検出されている。特にまとめて確認された掘立柱建物跡は、側柱建物を中心に調査区北側の東西50m、南北50m内に建てられていた。これらは3×2間の建物を主体とする南北棟あるいは東西棟で、特に南北棟が全体の55%を占める状況にある。峯崎遺跡第1～4次の報告では、これらの建物を方位により1～4群に分類し、時期をⅠ～Ⅲの3期に捉えている。また、Ⅱ・Ⅲ期の建物より奈良三彩が出土していることから、Ⅱ期に機能の盛期があったことを指摘しているが、性格については官衙的な様相が見られるものの、これを決定づける資料はなく結城郡衙の一部、あるいは豪族居館の一部とされてきた。

Ⅲ 調査の方法と経過

調査の方法 調査は試掘調査で、掘立柱建物跡の確認を主たる目的として面的に行い、特に①建物の範囲、②建物の所属時期あるいは住居跡との新旧関係、③これまでの調査との関連に主眼をおいて実施された。

調査は確認調査である為建物の柱掘り方を必要最小限にとどめ、一定の深さを掘り下げることにより柱痕を確認し建物の規模を把握した。掘り下げにあたっては、構築状況の記録を取ることと、柱痕の確認に専心し、出来るだけ半截に努め、半截したものは土層図を作成した。更に住居跡との新旧関係把握の為のサブトレンチを設定し、部分的に住居跡の調査を行った。

実測図は、遺構配置図を1/100、各建物の平面図・土層図を1/20で作成し、写真は白黒35mm・6×7判、リバーサル35mmを随時使用した。

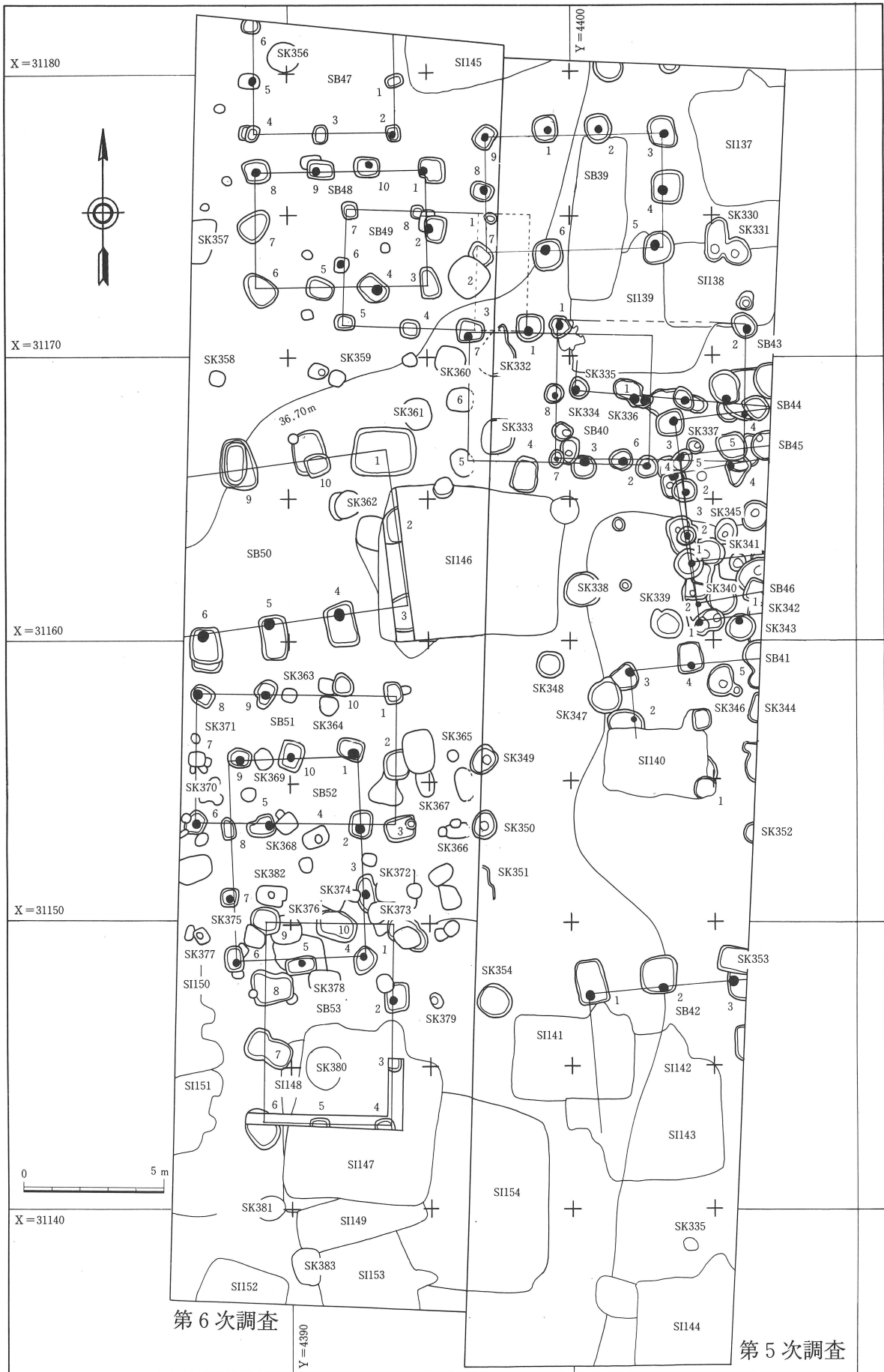
また、本書においては下記の略号を用い、遺構番号についてはこれまでの調査から継続して付した。

峯崎遺跡第5次……MS5 第6次調査……MS6 住居跡……SI 掘立柱建物跡……SB 土坑……SK

調査の経過 第5次調査を平成9年3月5日～同年3月25日までの間、第6次調査を平成9年7月22日～同年8月13日までの間それぞれ実施した。調査経過の概略は以下の通りである。

第5次調査 3月5～7日、調査準備を行い、プレハブ・トイレ等を設置する。10日、調査を開始する。器材を搬入し、調査区の北東端から重機を使用して慎重に表土除去を行う。11日、表土除去を終了し、遺構確認作業に着手する。12日、公共座標を用いて5×5mの方眼杭打ちと水準点を設置する。建物の柱穴を一定の深さに掘り下げ柱痕の検出に努める。また、これと併行して遺構分布図を作成する。17日、建物跡の調査を継続すると共に個別実測に取りかかる。18日、住居跡と重複関係のある建物跡を掘り下げ、新旧関係を把握する。21日、全測図を作成する。24日、遺構調査を終了し、これを受けて現状復帰を目的に埋め戻しを開始する。25日、埋め戻しを終了し、現場における調査を無事完了する。

第6次調査 7月22日、市教育委員会により調査範囲の設定を行う。器材搬入。24日、調査開始。重機を使用して慎重に表土除去を行う。25日、遺構検出作業の着手と同時に遺構配置図を作成する。29日、SB47～49を掘り下げる。30日、SB50～52を掘り下げSB47～49の実測を行う。8月1日、精査の結果SI146の覆土上層よりSB50の掘り方は確認されなかった。4～6日、SI147・149・150・151・153・154の覆土上層面での遺構確認を行う。また、SI154はほとんど床面であり、土師器坏A・刀子が出土し、この土師器坏Aには「門」の墨書が確認されている。7日、SI147内にSB53の確認サブトレンチを設定し、これによりSB53が古いことが判明する。全測図作成。8日、SI146内にSB50の確認サブトレンチを設定し、SB50が古いことが明らかとなる。全体写真を撮影し、遺構調査を終了する。11日、埋め戻しを行う。12日、器材の搬出。13日、プレハブを撤去し、現場における調査を完了する。



第4図 第5次・第6次調査区全体図

IV 遺構と遺物

第5・6次調査は、これまでの調査区の北部分に位置する約1,000㎡の範囲を対象として実施された。確認された遺構は、両者併せて住居跡17軒・掘立柱建物跡15棟・土坑54基で、主に8世紀から10世紀へかけての遺物が出土している。これら出土した遺物は、遺構の所属時期を端的に示すものと捉えられるが、調査自体建物の範囲確認に主眼をおいており、遺構全域を完掘している訳ではない。この為、後日、本調査の結果によっては変更を余儀なくされる部分もあろうかと思われる。本書では建物の新旧関係、建物の広がりなど得られた資料の提示を主とし、提示にあたっては紙面上の制約もあり、以下の通り概要と問題点を整理した。

住居跡 第5・6次調査を併せて17軒が確認されている。確認状況においては面積約7～36㎡の規模に納まり、カマドは北と東壁に付設されていると見られ、北カマドが多数を占めている。各住居の機能期間は、建物跡との前後関係を把握する為に部分的に掘り下げを行ったところ、SI154からは10世紀前半、SI138からは10世紀代の遺物が出土し、この他は概ね9世紀後半の時期にまとまりを見せ、該期に主体を持つものと推測された。各遺構との新旧関係を捉えると、SB39とSI139 (SB39新)、SB39とSI138 (SI138新)、SI138とSI139 (SI138新)、SB41とSI140、SB42とSI141・142・143、SB50とSI146 (SI146新)、SB53とSI147 (SI147新)、SI147とSI148・149・154・153 (SI148・149⇔154⇔147・153 旧⇔新)、SI150とSI151であり、9世紀後半のなかで少なくとも3期には細分され、全体で5期以上の機能期間があったものと考えられる。

出土遺物は文字資料が多く、墨・刻書をはじめなかには朱書 (SI146・154) も含まれている。この他SI147・149・154からは緑釉陶器の硬陶1点、軟陶2点、SI157からは須恵器の甕を転用使用した硯、SI146からは黒笹90号窯式と推定される灰釉陶器の碗・長頸壺が出土し、時期判断においての指標となっている。また、SI146・147は鉄滓の出土が見られ、鍛冶工房など鉄にまつわる施設の存在が示唆される。

掘立柱建物跡 掘立柱建物跡は、3×2間の側柱建物を主体とし、併せて15棟が確認された。建物の方向は南北棟が3棟、東西棟が9棟、東西棟と想定される建物が3棟で、規模は、桁行が6～7m、梁行が4～5.6mである。柱間寸法はSB39を例に取ると、心々で1.8～2.1m (6～7尺) 前後の数値が得られる。建物構造・柱間・規模等の傾向は、これまでの調査と比べ際立った変化はなく峯崎遺跡の一つの特徴である。

建物の範囲は、第5・6次共に調査区の北側・中央・南側と平均して確認され、全体的には南側に住居跡が占地し、建物跡はやや希薄となる。建物方向から捉えた分布は、調査区の北側から中央部で東西棟が、北・南側に南北棟がそれぞれ位置している。また、建物群自体の範囲を決定づけるものでないが、下表の通り、SB39・47・48・53の柱筋が通ることも今回の調査成果の一つと言える。

建物は、その方向により分けると、4群に分類が可能である。これを第1～4次調査の成果と合わせると以下の通りとなるが、これまでの調査は公共座標を用いていない為、今回の調査とは同様に扱えない事態が生じている。したがって分類にあたっては、真北と公共座標北の誤差を茨城県の場合東に6～7°振れていることを考慮して行った。この結果、第5・6次の調査における建物は第1～4次の建物分類とほぼ合致することがわかり、『峯崎遺跡』の分類に照し合わせると、多少の誤差を考えてもおおまかに①・②群はⅢ期、③群はⅠ期に相当する。また、新旧関係の明確に把握される建物により機能期間を推し量ると、SB39と

群	第5・6次調査	建物番号	備考
①	N-0°-W N-90°-W	SB47・53 SB39・48	柱筋が一致する
②	N-3°-W N-93°-W	SB52 SB41・42	柱筋が一致する
③	N-88°-W	SB48・51	
④	N-100°-W	SB50・44・46	

SI139との重複ではSB39が新しく、SB50とSI146とでは部分的な調査からSB50が古い構築であることが明確となる。このSI146からは黒笹90号窯式の灰釉陶器碗・長頸壺が出土し、9世紀後半の年代が導き出せ、



第5図 掘立柱建物跡配置模式図（1：1,000）

SB50はこれ以前の構築と判断された。更にSB53とSI147ではSB53の構築が古く、SI147からは10世紀前後の遺物が出土しており、これをさかのぼると考えられる。一歩進めて、少ないながら各建物の柱掘り方より出土している遺物を見ると、SB45が8世紀代の可能性、SB47が9世紀前後、SB50が9世紀中葉、SB43が9世紀後半、SB39・44・48・49・51・52・53が9世紀代の年代を与えることができる。ただし、前述した通り今回の調査は部分的なものであり、遺構時期を断定づけるには早急と言わざるをえない。

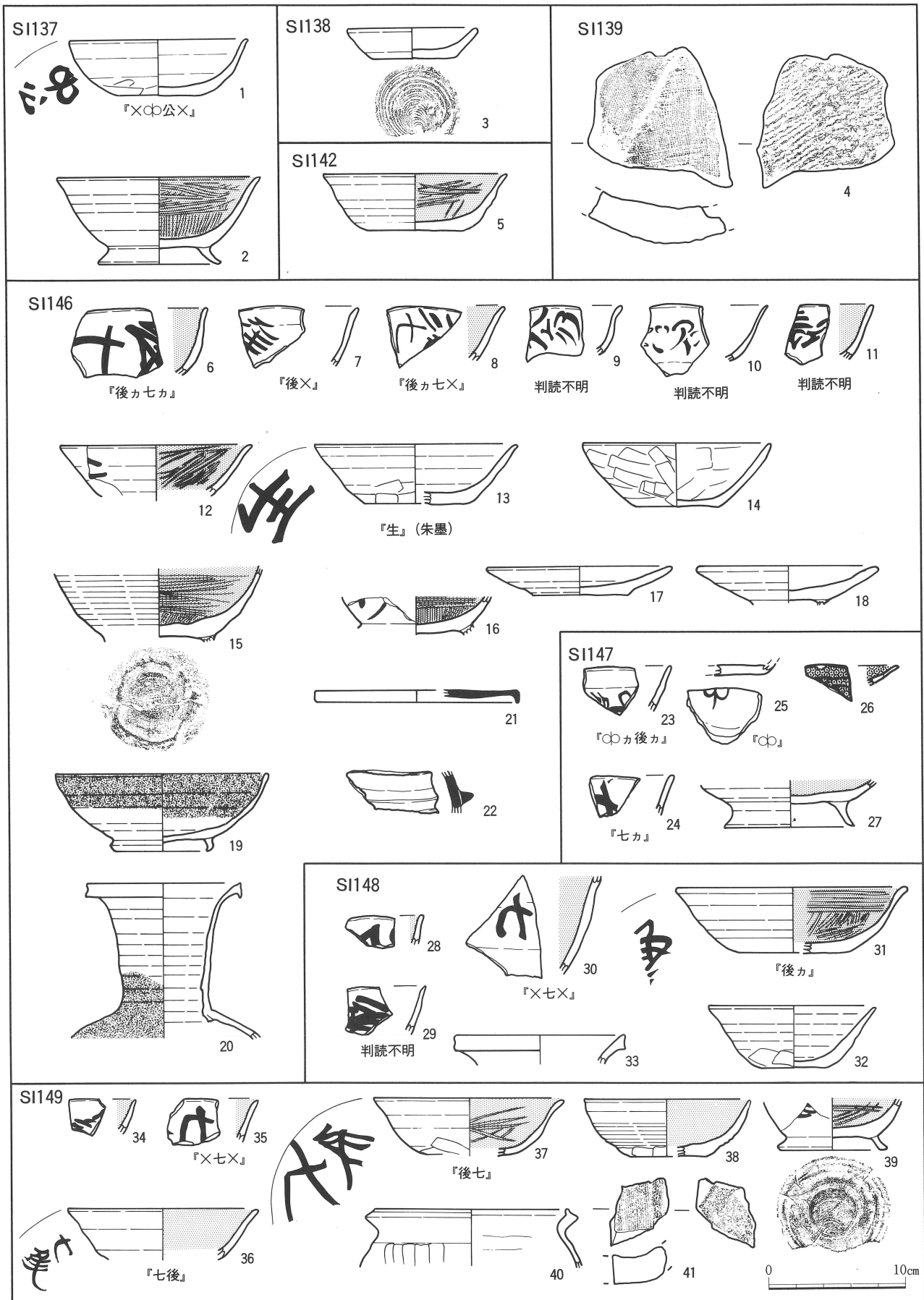
遺物 調査により得られた遺物は、全体で遺物収納箱7箱に及び、内容については抄録に記載し、このうちの74点を掲載した。遺物の時期は8世紀前半頃から10世紀代へと時間幅を捉えられるが、量的には9世紀後半に主体を持っている。須恵器については、供給源を明らかにできなかったものの、胎土観察の所見としては、新治窯及び木葉下窯の製品は少ない状況にある。なお、図示した遺物の他に緑釉陶器（軟陶）や朱墨土器、鉄滓が出土しているが、これらはいずれも細片の為あえて図示せず写真図版にて提示した。

1・2はSI137よりの出土である。1が土師器の坏A、2が土師器の碗Bで、1には体部外面に横位で「×φ公×」の墨書が見られる。3はSI138より出土した土師器小型の皿、4はSI139から出土した平瓦で、凸面に縄叩き、凹面に布目圧痕が観察される。5はSI142から、6～22はSI146からの出土である。6～13・16は墨書土器で、6が「後カ七カ」、7が「後×」、8が「後カ七×」と判読される。13・14は土師器坏Aで、13は体部外面に正位で「生」と朱書し、14は口径に比して底径がやや小さく、体部外面は篋削り、内面は篋撫でにより整形する。15・16は土師器碗Bで、15の底部外面には刻書、16の体部外面には墨痕が見られる。17は、土師器皿A、18は高台が失われているが皿Bである。19・20は灰釉陶器の碗と長頸壺で、刷毛塗り及び高台が三日月状を呈するなど、黒笹90号窯式の特徴を備える。21は葉壺（壺A）の蓋である。22は羽

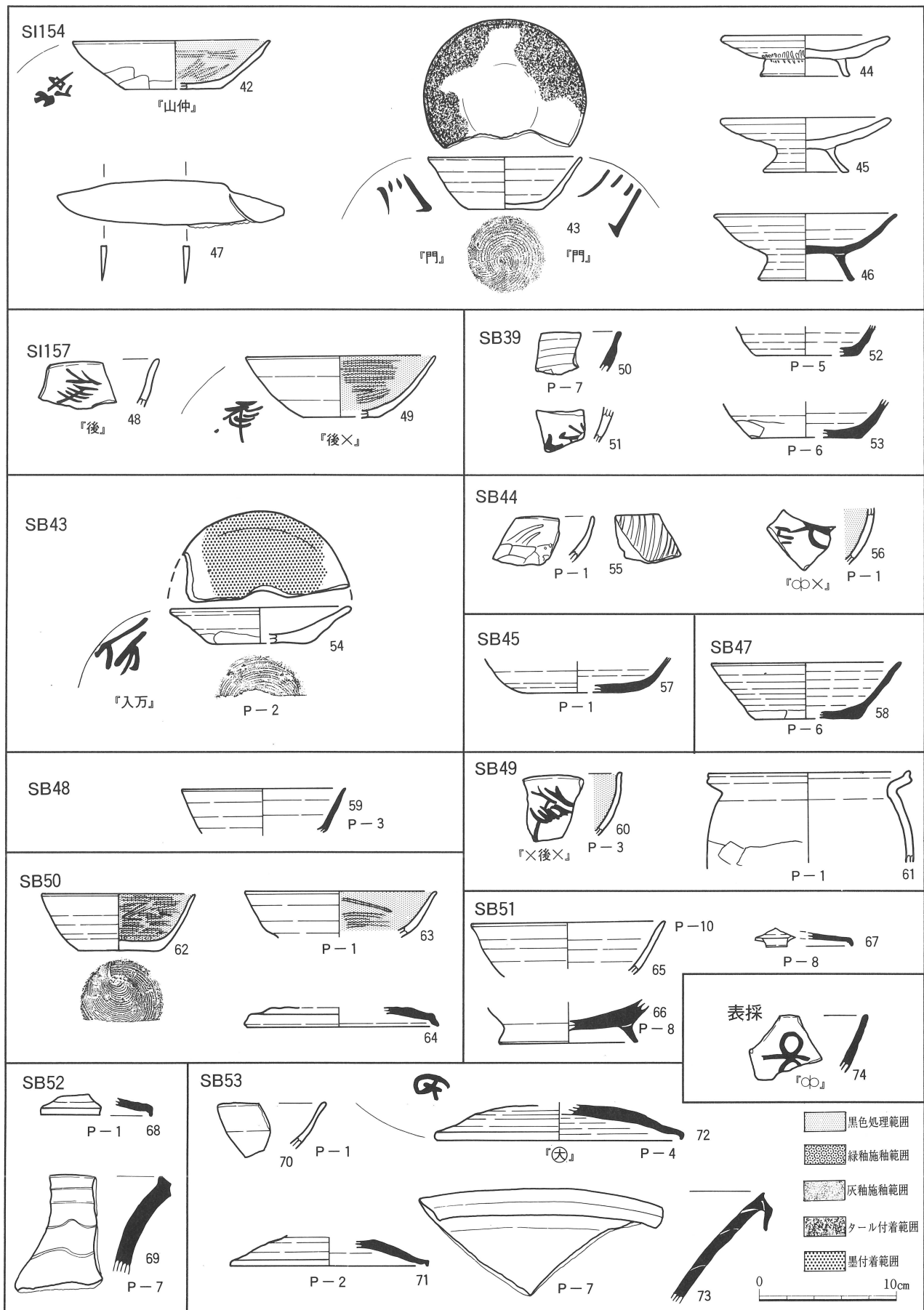
釜片で、特に羽釜はSI146一連の出土遺物より時期的に新しく、SI138と同時期もしくは近接する時期のものと考えられる。23～27はSI147よりの出土で、墨書土器が出土している。23が体部外面に横位で「㊦カ後カ」、24は「七カ」、25は底部外面に「㊦」と記される。26は緑釉陶器皿（硬陶）の口縁部片、27は土師器坏Bあるいは碗Bで、高台の足高傾向が窺われる。28～32はSI148の出土で、30には「×七×」、31には「後カ」と横位で墨書される。32は土師器坏A、33は灰釉陶器長頸壺の口縁部片である。34～41はSI149よりの出土で、35には「×七×」、36には「七後」、37には「後七」と墨書される。41は平瓦で、凹面に模骨痕が残り、8世紀代の所産と判断される。42～46はSI154の出土で、42・43が墨書土器である。いずれも土師器坏Aで、42は体部外面に横位で「山仲」と記し、43は、体部の内外面に正位で「門」と記す。43の調整は回転糸切りによる切り離しのままで、内面にタールが付着する。このタールは墨書の上に被っており、墨書後灯明等に使用されたと考えられ限定された用途が窺われる。44～46は土師器・須恵器の皿Bで、いわゆる足高高台である。47は鉄製品で、全長16.5cm、幅3.4cm、厚0.5cmを計測する。一見刀子の様であるが、大型なことや柄部が折り返されていること、刃部の表面に微妙な膨らみがあり、背面が平らで一方を研ぎ出した状態であるなど鎌等の転用使用の可能性はある。48・49はSI157の出土で、両者共に体部に横位で「後」と記している。50～53はSB39の出土で、土師器に記された墨書土器1点と、須恵器坏Aを図示した。54はSB43から出土している土師器の皿Bで、硯として内面を使用したと見られ墨が残存する。なお、体部外面には正位で「入万」の墨書が確認されている。55・56はSB44の出土で、56に横位で「㊦×」と墨書される。57～59は須恵器の坏Aと見られ、それぞれSB45・47・48からの出土である。60・61はSB49からの出土で、60の外面には横位で「×後×」と墨書される。62～64はSB50から出土している。62は土師器坏Aで、容量が深くやや箱型であるが、底部の調整は回転糸切りによる切り離しのままである。65～67はSB51から出土し、66は須恵器の坏Aで、胎土に海綿骨針を含んでおり木葉下窯の製品である可能性を有する。68・69はSB52、70～73はSB53の出土である。72は須恵器の蓋で、内面を硯として転用使用し外面に「㊦」と墨書する。74は第6次調査の表採資料で体部外面に横位で「㊦」の墨書が見られる。

墨書土器 今回の調査において検出された文字資料は、墨の付着が確認されるものを含めると47点を数え、朱墨が2点含まれている。土器の欠損や墨の遺存状態により相違が見られるものの、判読された文字は「㊦公」・「後七」・「七後」・「後」・「七」・「㊦」・「門」・「山仲」・「入万」・「㊦」・「生」（朱）である。このうち多数を占めるものは、「後七」が可能性のあるものを含めると8点、「㊦」の使用が一部でも確認されるもの7点で、出土傾向はこれまでの調査と符合し、時期的には主に9世紀後半に集中するようである。第1～4次の調査において「㊦」は8世紀前半から10世紀前葉の集落と同時に伝統的に使用されており、「集落全体あるいは統治する長の記号」の可能性を指摘している。本調査においてそれを裏づけることは出来なかったが、広範囲にわたって出土していることから見て、遺跡内において意図的に用いられたことは十分に推測される。また、今回得られた「㊦」・「後七」は文字を横位で記しており、複数の文字が記されていた可能性は高く、中でも「後七」は何かに対しての後ろを意識していたとも想像され、今後遺跡の性格を考える上で意味を持つものと思われる。

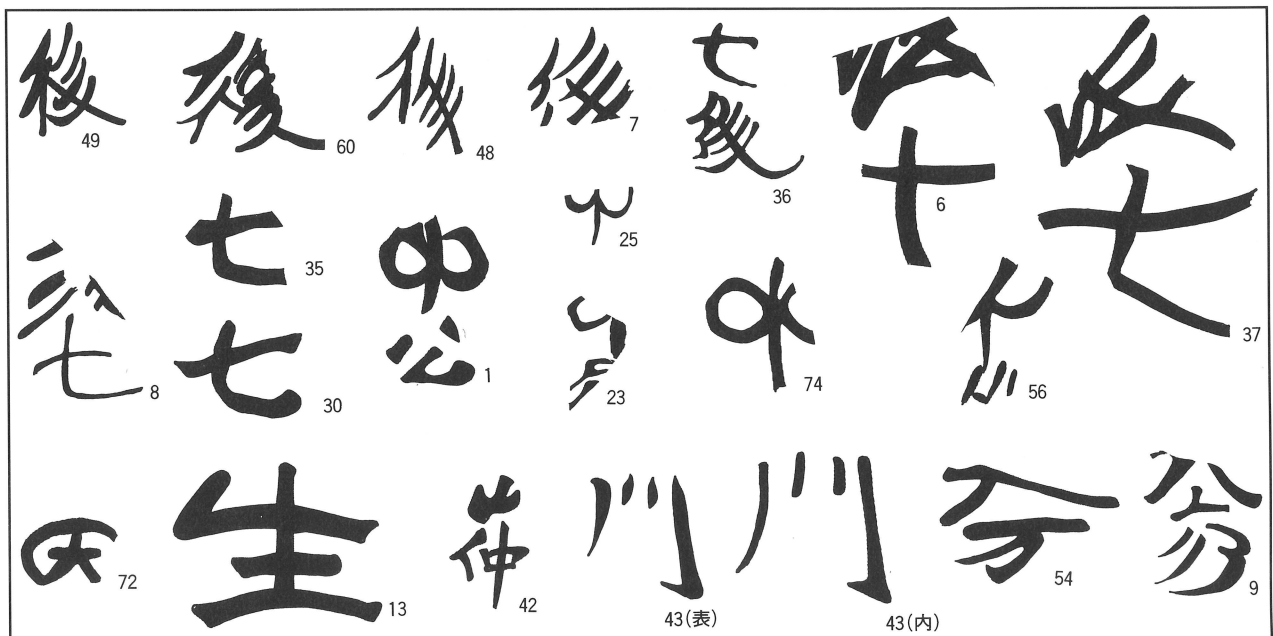
遺構名	数量	積文
SI138	1	「×㊦公×」
SI146	9	「後カ七カ」「後×」「生」（朱墨）
SI147	4	「㊦」「㊦カ後カ」「七カ」
SI148	4	「×七×」「後カ」
SI149	10	「×七×」「㊦カ」「七後」「後七」
SI154	3	「門」「山仲」（朱墨有）
SI157	3	「後×」
SB39	1	
SB43	1	「入万」
SB44	1	「㊦×」
SB48	1	
SB49	1	「×後×」
SB51	1	
SB52	1	
SB53	1	「㊦」
表採	5	「㊦」



第6図 出土遺物(1)



第7図 出土遺物(2)



第8図 墨書土器集成(1:2)

V まとめ

峯崎遺跡を特徴づける遺構は群をなす掘立柱建物跡であり、この建物群からは官衙の様相がくみ取れる。しかし、これまでの調査から出土した文字資料は、官衙的な様相を示すものではなく、「□寺」・「□申仏□」の墨書土器や土製螺髪から寺院などの仏教施設が、奈良三彩・緑釉陶器・邢窯産白磁碗から、地方豪族の居館等が想定され、郡衙に肯定づける資料は完全ではなかった。今回の調査の出土遺物を見て、緑釉陶器はあるものの、文字資料では「後七」・「公」・「公」など従来確認されていたものを主体とし、仏教あるいは官衙に関連するものは出土していない。調査が建物の確認に主眼をおいた試掘調査であることを反映してか、遺跡の性格は依然として不明のままである。一方、今回の調査のもう一つの目的であった建物群をはじめとする遺跡の広がりについても、残念ながら建物群の範囲を確定するまでには至らなかった。これまで実施されたレーダー探査による網羅図を見ると、建物群を包括する変化は、この第5・6次調査区の北側で空白になることが判明しており、このことを考慮すれば、一応建物群のまとまりは、北側が今回の調査範囲で概ね限定されると判断される。しかし、東西側については不確定な状況にあり、更に北側には空白を置いて地中変化が捉えられるなど、更なる確認調査の必要性を生じている。

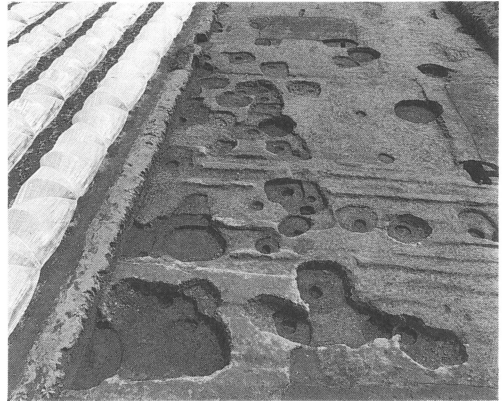
また、前述した様に本遺跡の北200mには油内・下り松遺跡が位置し、県教育財団の手により調査が実施されている。特に下り松遺跡からは121軒の住居跡、4棟の掘立柱建物跡、3軒の鍛冶工房跡が検出され、灰釉・緑釉陶器、朱書を含む墨書土器、皇朝十二銭、2體の小銅造仏が出土している。この小銅造仏は、小型地藏菩薩立像と小型観音菩薩立像で、平安前期の木彫仏に共通する特長を見せており、住居内から頭部を東に二體並んで仰向けの状態で出土した。遺跡の時期は奈良・平安時代(8世紀前半から11世紀後半)と、本遺跡と同時期であるなど、同一の遺跡として捉えられるべきものであり、遺跡名こそ個別に付されているものの、遺跡の広がりには明らかである。今後これらの調査を積み重ねることによって当時の景観を復元していかねばならず、この為にも建物群に止まることなく広域にわたる効率の良い調査が望まれる。

参考文献

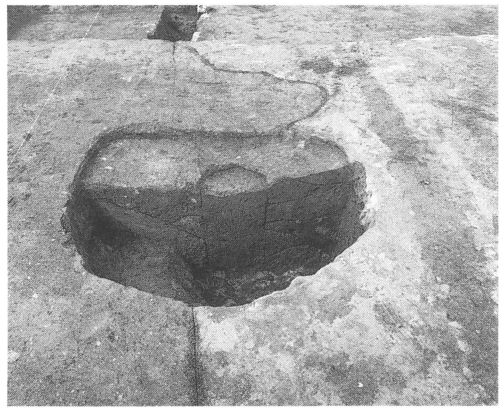
- 結城市 1996 『峯崎遺跡』結城市文化財調査報告書第7集
 茨城県考古学協会 1997 『第19回研究発表会資料 下り松遺跡』



1. 第5次調査区全景（北東より）



2. SB44・45・46検出状況（北より）



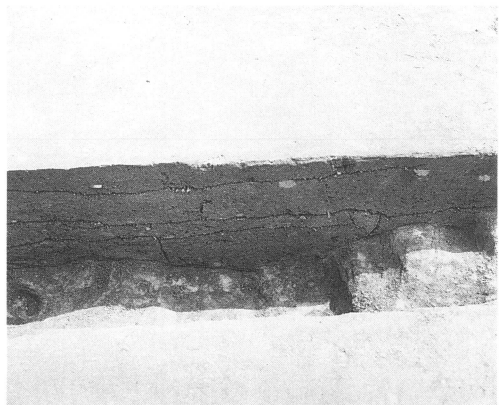
3. SB39 P-5確認状況（東より）



4. 第6次調査区全景（南より）

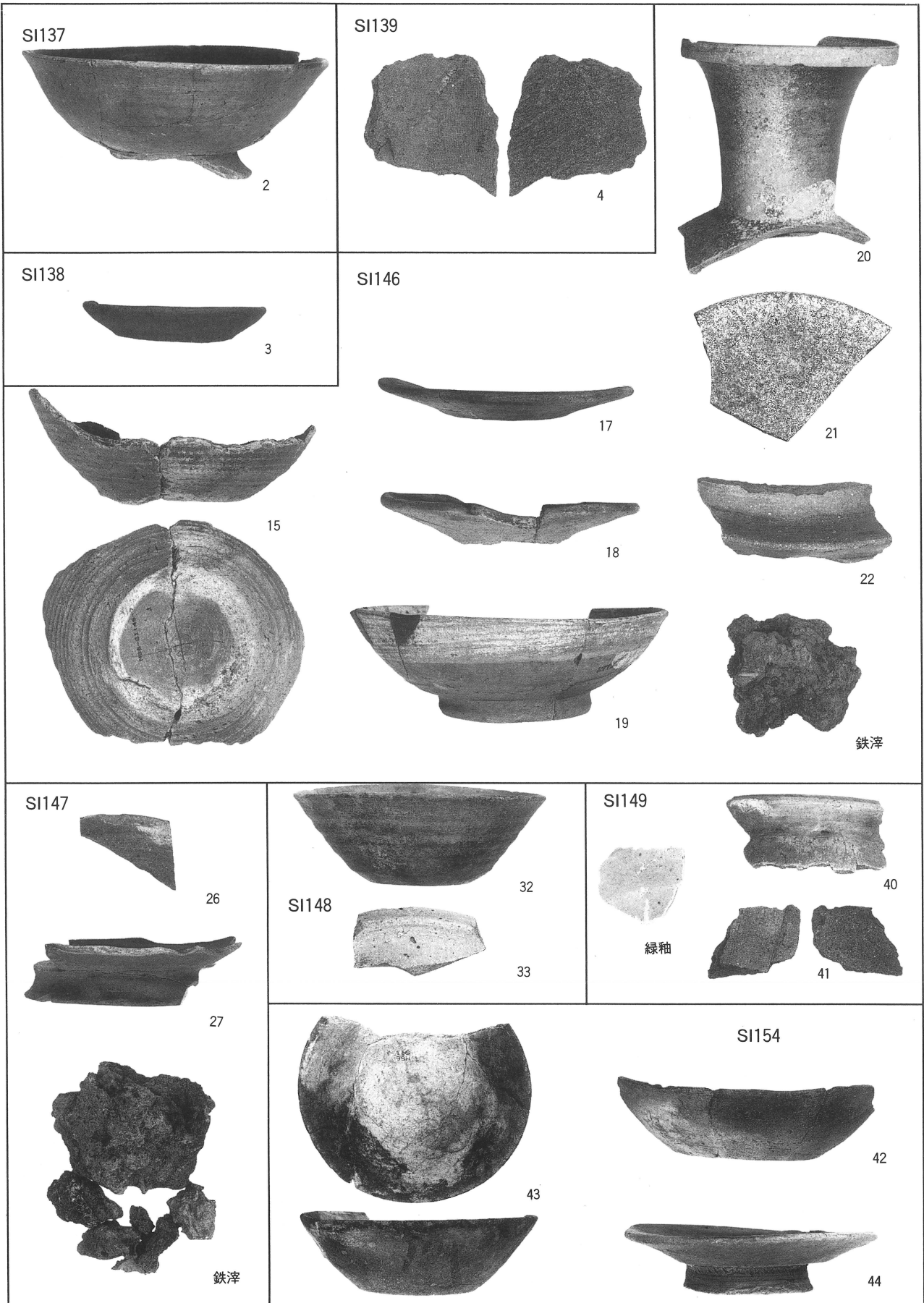


5. SB48検出状況（西より）

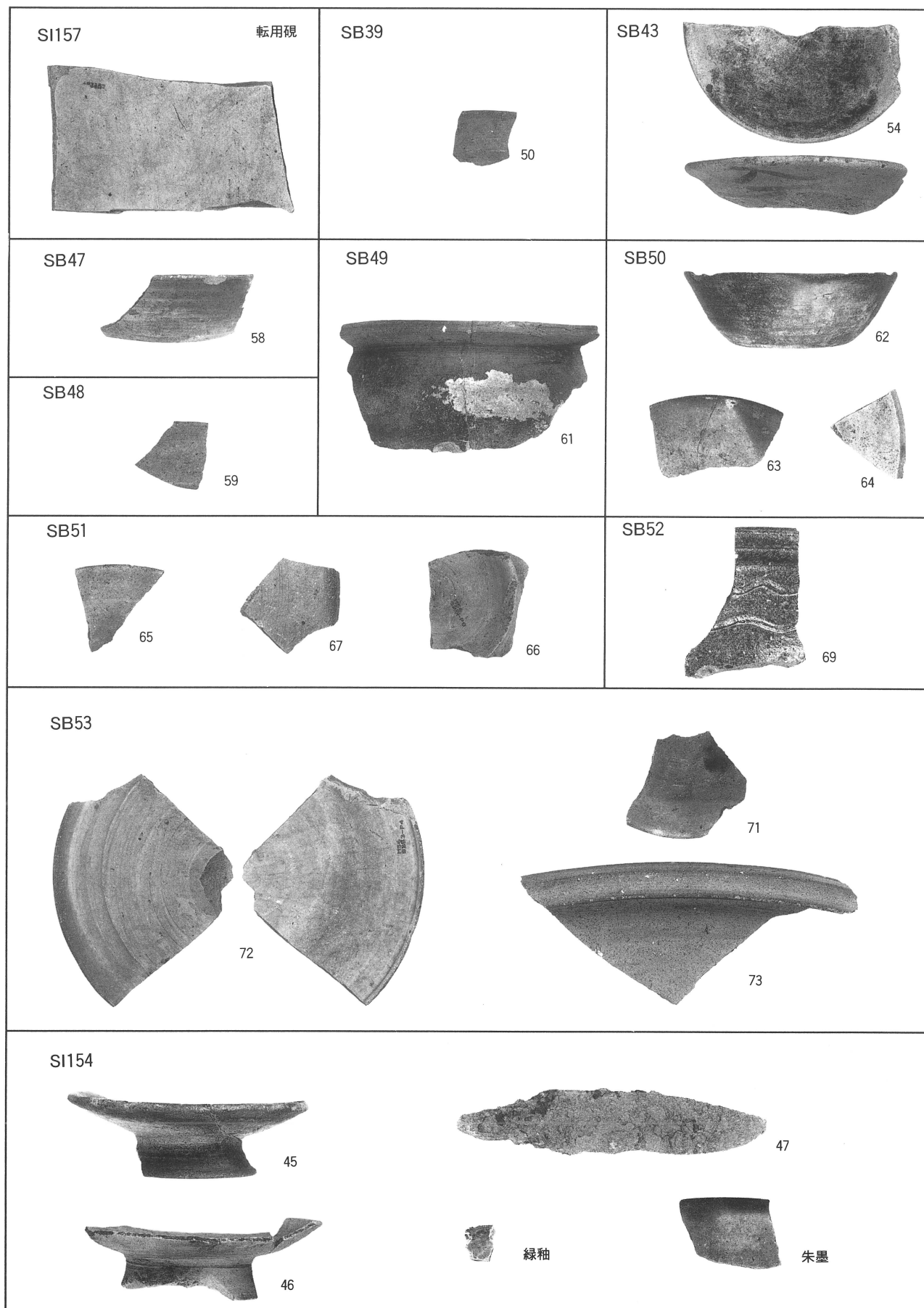


6. SB53 P-5確認状況（北より）

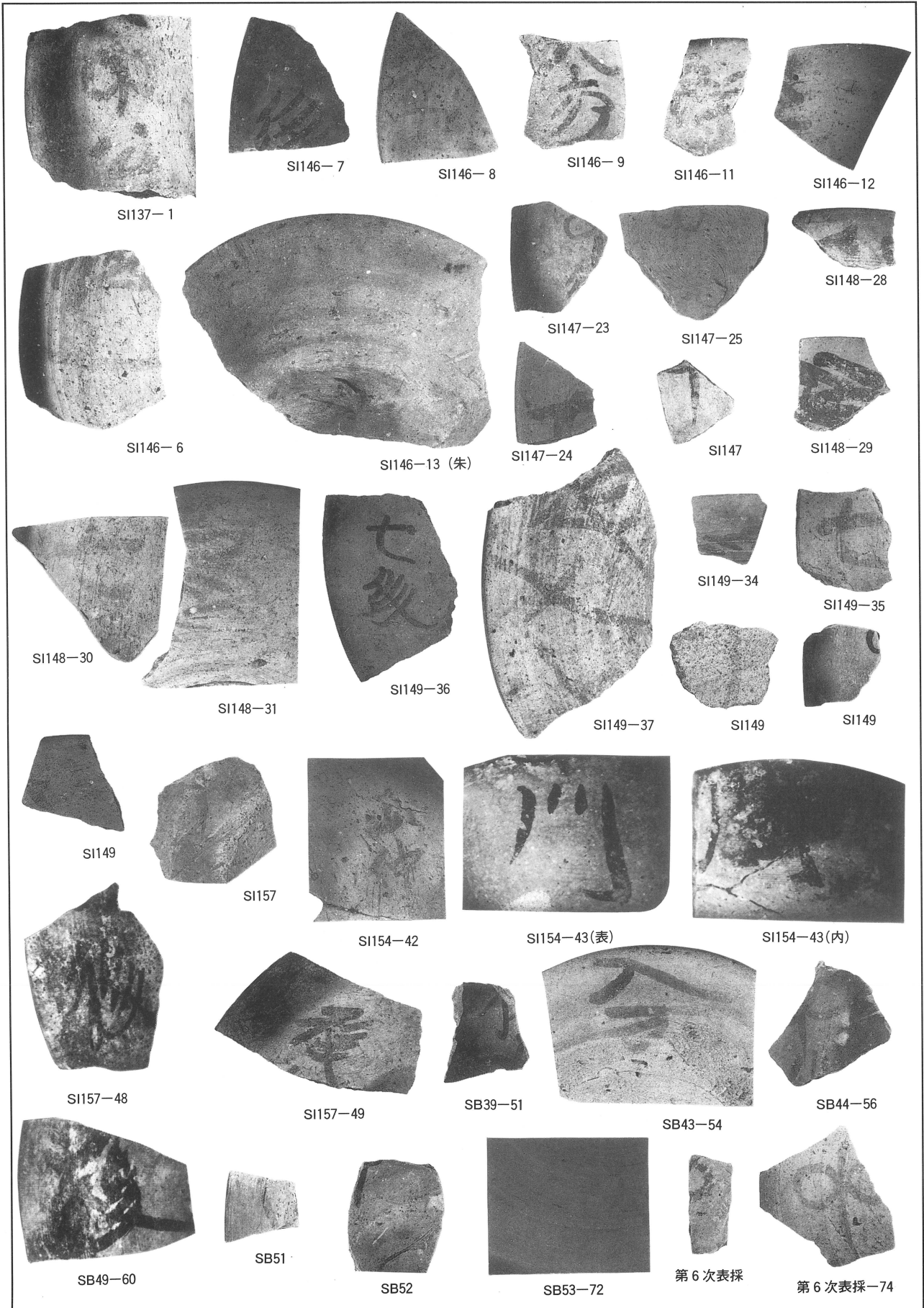
図版 2



出土遺物 (1)



图版 4



抄 録

フリガナ	ミネサキイセキ							
書名	峯崎遺跡							
副書名	下り松南部土地区画整理事業に伴う峯崎遺跡試掘調査報告書							
編著者名	間宮正光							
編集機関	山武考古学研究所／〒286-0045 千葉県成田市並木町221 ☎0476-24-0536							
発行機関	結城市／〒307-8501 茨城県結城市大字結城1447 ☎0296-32-1111							
発行年月日	西暦 1998年11月13日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ミネサキイセキ 峯崎遺跡 第5次調査 第6次調査	イバラキケンシュウキ シュウキ 茨城県結城市結城 アザミネサキ 字峯崎地内	082074	39	36° 16′ 51″ 1169	139° 52′ 55″ 9457	第5次 19970305～ 19970325 第6次 19970722～ 19970813	第5次 500m ² 第6次 500m ²	遺跡範囲 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
峯崎遺跡 第5次調査 第6次調査	集落跡	奈良・ 平安時代	住居跡 掘立柱建物跡 土坑	17軒 15棟 54基	土師器：坏A・坏B・椀B・ 皿A・皿B・甕 須恵器：坏A・坏B・皿B・ 蓋・長頸壺・甕・ 羽釜・甌 灰釉陶器：碗・皿・長頸壺 緑釉陶器：皿 その他：平瓦・墨書土器 (朱書含む)・ 土鍾・刀子・鉄滓		調査は建物群の範囲確認に主 眼をおいて実施された。本調 査により併せて15棟の掘立柱 建物跡が検出され、遺構の広 がりが捉えられている。建物 跡は各遺構との新旧関係と機 能時期を把握する為部分的に 掘り下げを行った。この結 果、緑釉・灰釉陶器や文字資 料が多数出土し、これまでの 調査と同様な成果を得てい る。	

峯 崎 遺 跡

下り松南部土地区画整理事業に伴う
峯崎遺跡試掘調査報告書

印刷 平成10年11月5日

発行 平成10年11月13日

編集 山武考古学研究所

発行 結 城 市

印刷 (株)文化総合企画

千葉県印旛郡富里町日吉台1-23-12

TEL 0476-93-0593

MINESAKI SITE

Report of Trial Excavation Relating to a Land Readjustment Project at the Southern Part of Sagarimatsu

Minesaki site is located at Aza-Minesaki, Yuki, Yuki city, Ibaraki prefecture. The site had been excavated four times in the past, and the area had reached about 15,000m², and structural remains and artifacts, belonging to the first half of the 8th to the 10th century and including 136 house sites and 34 buildings with pillars embedded directly in the ground, had been unearthed. Excavated numbers of the buildings have attracted attention, it seems that they were residences of county seats and/or powerful families.

The research of this time was conducted with the chief aim of confirmation of the extent of a group of the buildings. As a result, 15 buildings with pillars embedded directly in the ground were found, and the extent of the remains existing were elucidated. Excavated artifacts belong to the 8th to the 10th century, particularly a large number of green-glazed ware, ash-glazed ware and data with written characters have been discovered, therefore this research has obtained good data for us the same as the former researches.

CONTENTS

Preface

Introductory Notes

Contents

I	Background of the Research	1
II	Location and Historical Environment of the Site	
	Location of the Site	1
	Historical Environment of the Site	1
	Previous Researches of the Site	3
III	Method and Progress of the Research	
	Method of the Research	3
	Progress of the Research	3
IV	Excavated Structural Remains and Artifacts	
	House Site	5
	Building with Pillars Embedded Directly in the Ground	5
	Artifacts	6
	Pottery with Inscriptions in Black Ink	7
V	Conclusion	10
	Photo Plate	
	Abstract	